



林の王城山神社には4体の双体道祖神があり、このうち最も古い左端の像は宝永3年(1706年)に作られたもの。他の2体も1700年代の作と古わりに状態が良いので、年代や石工による造りの違いを見比べてみるのも面白いです。

作られたのは
310年前！



碑型の
かたちも
いろいろ！

双体道祖神は、背後の碑型にもいろいろと種類があります。「舟後光」と言われる船の舳先のような形(右)、自然石をくりぬいて笠をつけたもの(左上)、神社建築にも見られる「破風」(三角の屋根)がついたもの(左下)など。

旅人にも人気の
「アベック地蔵」

ダム工事以前は上湯原にあり、「アベック地蔵」として親しまれていた道祖神。(正確にはお地蔵様ではないのですが…。)女神をしっかりと抱きしめる男神の表情にご注目！(※現在は移設先を検討中)



文字だけの
道祖神も
あります



道祖神には、双体道祖神のほかにも文字碑のみの「文字塔」もあります。長野原諏訪神社には、文字塔と双体神が並んで設置されています。

いろいろなタイプを
さがしてみよう！

集落の入口の
見張り番



草木原の集落の入口、十二社内にある道祖神。道路側壁の工事により高い所に移されましたが、およそ元からあった場所に保存されています。道祖神がそもそも、集落や村の境に祀られていたことを今の時代に伝えています。



古森の双対道祖神

vol.02

足もとの神様・道祖神をめぐる春散歩

〔長野原町の道祖神〕

長野原町には、今も多くの石造文化財が残されていますが、なかでも、道ばたで男女の神様がそつと身を寄せ合う双体道祖神は、私たちにもっとも身近で、親しみやすい存在ではないでしょうか。昔も今も、私たちの暮らしを見守ってくれている道祖神。そんな足もとの神様を探しながら、春の町内をのんびり散歩してみませんか？

私たちの暮らしに身近な
ほのぼの・ラブラブな守り神！

道祖神は、別名を「塞の神(サエノ神)」とも言われます。塞とは「ふさぐ」「さへぎる」という意味で、悪霊や疫病など邪悪なものが集落に入り込んでこないように、村境や辻・峠などに祀ってきたのが始まりです。そこに中国に伝わる「道の神」の思想が結びつき、旅人の安全を守る神様に、また猿田彦神話と結びついて男女双神となり、縁

結びや子宝の神様となるなど、私たちの暮らしに身近な守り神として様々な性格を持つようになりました。

この道祖神信仰は、関東甲信、とりわけ長野や山梨・群馬に多く、群馬県内でも吾妻郡を含む西部の山沿い地域に多く見られます。長野原町には、46体の道祖神が確認されており(昭和60年調べ)、そのほとんどが男女の神様が並ぶ双体道祖神です。姿かたちはそれぞれに個性的。瓢(ひょう)や盃(さかずき)、笏(しやく)を手にとり添うものから、握手をするもの、男神が女神の肩や腰に手を回すもの、さらには下腹部に手を伸ばすものまで(夫婦和合を表しています)。神様というより、すぐ身近にいるお隣さんのようなほのぼのとした表情に、手を合わすこちらとも思わず笑顔になってしまいます。

残されている道祖神の多くは、町割りや道路の整備により本来あった場所からは移されていますが、今も神社の境内やかつての旧道のはずれなどでひっそりと、村人の平穏な暮らしや旅人の安全を見守り続けてくれているのです。



木像道祖神ほか小正月のツクリモノ。(「山村開発センター」に展示されています。)

◎今回訪れたのは… 長野原町の道祖神

参考文献：「長野原町の道祖神」
昭和 60 年発行／長野原町教育委員会



東吾妻町から国道一四五号線の茂四郎トンネルを抜けると、真正面に山脈が見えてくる。その真中に丸い岩山がある。
八ッ場の道の駅を過ぎた頃からクローズアップすると、半円形のドーム状の形態をしている。
およそ100万年前に形成された輝石安山岩からなる柱状節理が

文化財だより

ふるさと 再発見

[2]

戦国の歴史を語る丸岩城



します。

今回は【ツガザクラ】をご紹介します。

山と対岸に位置する王城山が戦争をして、片耳を削がれてしまったので、今の形になったという。

眺めは、木々の間から眼下に集落（林、長野原）が見える。

なお、口頭・伝承によると丸岩山と対岸に位置する王城山が戦争をして、片耳を削がれてしまったので、今の形になったという。

次回【ツガザクラ】をご紹介します。

特徴的で、高さ約100メートルもある岩が柱状に連なるさまは圧巻である。その頂上は草木に覆われているが、空堀と土塁が張り巡らされていて井戸の跡もある。これが【丸岩城跡】である。

戦国時代の要塞・砦として、麓の柳沢城を支配していた武田氏の家臣が、大戸方面から侵入してくる北条勢に備えていたという。

国道四〇六号線須賀尾峠付近の登山口から急峻な尾根伝いに登ること三十分で頂上に着く。

眺めは、木々の間から眼下に集落（林、長野原）が見える。

なお、口頭・伝承によると丸岩山と対岸に位置する王城山が戦争をして、片耳を削がれてしまったので、今の形になったという。

今回は【ツガザクラ】をご紹介します。

次回【ツガザクラ】をご紹介します。

まだまだある！ 道祖神にまつわるお話。

真田氏の統治時代に開かれた吾妻溪谷沿いの道は、「道陸神峠道」と呼ばれていました。この道陸神も道祖神のこと。岩場を切り拓いた難所続きの峠道にこうした名前がついたのも、外部から悪疫が入ることを防ぎ、険しい道中の無事を道の神様に祈る、当時の人の思いがあったからでしょう。

また、道祖神信仰を今に伝える行事が、小正月に行う「どんど焼き」です。その年の平安と豊作を祈る小正月の火祭りは全国的に行われ、松飾りやだるまを燃やすのが一般的ですが、吾妻郡には、ヌルデの木でツクリモノと呼ばれる道祖神や用具類をつくり、家の中の神棚や道祖神場にお供えするという独特の風習があります。

足もとの小さな神様に目を向けてみれば、かつての町のかたちや暮らしの在り方が見えてきます。



05 大津 勘場木

勘場木遺跡近くの小高い丘に残る3体。唯一年代のわかる右端の道祖神(明和7年/1770年)にはうっすらと着色の跡も。



03 長野原 諏訪神社

参道入口近くにある文字塔と双体道祖神。大正11年と比較的新しいため、表面の堀りの状態も良い。

04 長野原 仲之町

群馬銀行の裏手。キリツと凛々しい男神とふくよかな優しい女神の表情がよく残されている。



06 草木原

草木原の集落の入口、古くからの街道沿いにあるため、おそらく設置当時から場所が移されていない貴重な一体。



07 羽根尾 諏訪神社

神社の鳥居脇に並ぶ2体。右の道祖神は天保13年(1842年)に作られたものだが最近塗り直し、おめかししている。



08 古森

草津から沓掛(中軽井沢)への街道と、信州街道の脇道への分岐点近く。梅の木の下で3体の道祖神が仲良く並ぶ。



02 横壁 諏訪神社

神社の移設とともに2体の道祖神も移された。境内には道祖神の他にも弁財天などいくつもの石像物がある。



01 林 王城山神社

神社の境内に並ぶ4体の道祖神。左端は、年代の判明している中で、は町内最古(宝永3年/1706年)。



09 小宿 神明宮

常林寺近く、小高い丘に建つ神明宮入口に残る一体。石碑側面にはっきりと「文化」の刻印が読み取れる。



10 応桑新田

今ではほとんど読み取れないが「右ハはるな、左ハくさつ」と記され、道しるべを兼ねた珍しい一体。(※個人宅内)



11 狩宿

摩耗が激しく像の形はほとんどわからないが、大戸～須賀尾～狩宿を結ぶ万騎峠の西側の峠口に今も残る。

